

『クズなりに』

林田
麻美

空き巢歴60年、生粋のコソ泥・田西吾郎(76)は、もう何度目かもわからない「お勤め」を終え、娑婆に出る。「余生も長くないのだから、最後までらいまともに」との刑務官の諭しも虚しく、翌日さっそく新たな罪に手を染める。ところが、そこで彼が盗んだものは、穢れなき二歳児・凌空であった。いつも通り金品目的で侵入したはずが、その家の母親が育児ノイローゼから息子に手をかけるところを目撃し、衝動的に連れ出してしまったのだ。

だが自分の生活すらままならない吾郎は、偶然再会した刑務所の同期・樋村雄司(26)のアパートへ押しかける。初めは突き放そうとする雄司であったが、自分の子を身籠っていたはずの彼女に「もうとっくにいない」と告げられたばかりだったこともあり、凌空が愛おしく思えてならず、吾郎もろとも受け入れてしまう。こうして始まった、おかしな共同生活。吾郎と雄司は、可愛いばかりではない凌空に振り回され、衝突したり結託したりを繰り返し、互いの関係性、人間性を変化させていく。

しかし、そんな日々も長くは続かず、凌空を捜す警察の手が間近に迫る。むろん吾郎も雄司も、すぐに終わりが来ることを承知の上で過ごしてきたのだが、いざ別れを前にすると「あと一日だけ……」そんな思いに駆られ、凌空を連れて小さな旅に出る。これが最後になるなんて嘘のように、滑稽で温かな空気に包まれる道中。「このまま本当に、攫ってしまおうか？」吾郎と雄司の頭には、そんな考えさえ過った。

三人が目指したのは、海だった。到着目前、初めて見る水平線を指さし「お空はんぶんこー！」と凌空がはしゃぐ。吾郎はこれを面白がり「半分は自分ののだとして、もう半分、俺か樋村君かどっちにくれる？」と訊ねる。が、凌空の答えはどちらでもなく、吾郎は改

めて「この子には、帰る場所がある」と観念するのだった。
アパートに戻ると、凌空は両親の元へ還され、吾郎と雄司はあえなく御用に。奇跡のよ
うな時間は、捕まえておくことなどできず、
無情に過ぎ去る。ただ、それぞれの胸に少し
ずつ、明るい兆しを残して。

登場人物

田西 吾郎 (76) ……生粋のコソ泥

樋村 雄司 (26) ……元オレオレ詐欺師

倉本 凌空 (2) ……イヤイヤ期の子供

倉本 泉美 (34) ……凌空の母

倉本 傑 (41) ……凌空の父

三上 結衣子 (22) ……雄司の元(?)彼女

刑務官 I / II

刑事 A (男性) / B (女性) / 鑑識官

銭湯の客・堅気の老人 / 極道の中年

××引越社 (雄司の勤務先) 従業員

××急便 (結衣子の勤務先) 従業員

総合病院 (泉美の入院先) 医師

小児科 (凌空が受診) 医師 / 看護師

屋台の店主

ゴミ収集の職員

スーパールの客・母 / 娘

靴屋の店員

アイスクリーム屋の店員

目撃者の主婦

居酒屋の店員

○刑務所内・事務室

入所時に預けられていた所持品を並べて
いく刑務官の手。

二本しか入っていないタバコ、ライター、
薄汚れた手ぬぐい、数百円入った巾着袋、
下着、シャツ、ズボンが、テーブルの上
に整然と。

それらに目を落とす田西吾郎（76）。

刑務官Ⅰ「これで全部？」

吾郎「軍手とドライバーと、あと針金がない」

刑務官Ⅰ「それは証拠品としてとつくに」

吾郎「ああ……」

刑務官Ⅰ「ああ……って、まだ必要？もうや
らないって約束できますよね？」

吾郎「はあ……」

刑務官Ⅰ「ね？約束してもらわないと送り出
せないよ？」

吾郎「まあ、引き続き面倒見てもらえるんだっ
たら、そらありがたいですが」

刑務官Ⅰ「そういう話してるんじゃないでしょ
う」

席を立ち、ズボンを穿き替え始める吾郎。

腰を労わりながら、

吾郎「まあ、自分も歳だもんで、もう体がね
え……」

刑務官Ⅰ「体が……じゃなくて（溜息）。ほん
とにもう余生も長くないんだから、ちゃん

と改心して、真面目に暮らさないよ」

吾郎、なかなかズボンを上げられず、

吾郎「体がなあ……」

刑務官Ⅱ、黙って吾郎の着替えを介助。
ズボンが上がった。

刑務官Ⅰ「（やや声を荒げて）田西さん、人の
話聞いている？耳が遠いの？もっとおっきい
声で話す？」

刑務官Ⅱ、Ⅰの肩をポンと叩いて宥め、

テーブルの上に封筒を出して、

刑務官Ⅱ「（吾郎に）これ、ここでのお勤め料。

計画的に使ってくださいね」

吾郎、すぐさまズボンのポケットへ。

刑務官Ⅰ「ね、田西さんにだってお母さんは
いたわけでしょ？そのお母さんのためにも
最後までらいまともに」

吾郎「(大げさに溜息をつき)ボケてんのかね、
お前さんらは。何度も言われて、何度も言っ
てますけども、忘れたんですよ、そんなも
ん。ずーつと昔に」

残りの所持品を紙袋に雑に詰め、

吾郎「どうも世話になりました」
と出口へ向かう。

○同・外

門へ向かって歩く吾郎。

その後方、建物の前で見送る刑務官ら。

刑務官Ⅰ「(肩を落とす)天からのお迎えが先
か、出戻って来るのが先か……」

刑務官Ⅱ「(Ⅰの肩に手を置き)人を正すのは
まあ、法でも力でもなく、もっと言えば情
でもない。その人間自身に、失いたくない
何かがあるかどうかなんだろう……」

○同・外門

門を出たところで太陽を見上げる吾郎。

目を細めながら、ぐっと伸びをする。

と、ピキン！

吾郎「ああ、つつつつ……」
腰を押さえ、歩きだす。

○街(夜)

月はまだ低い。

ふらつきながら歩く吾郎。赤い顔。

道端の屋台に目を留める。

○屋台・内(夜)

席に割って入る吾郎。

くしゃつとなつた茶封筒を出し、

吾郎「おー大将、いい酒出せー！出所祝いだ！」

周りの客ら、吾郎と距離をとる。

不愛想に吾郎の前にコップを置き、酒を

注ぐ店主。

吾郎、それを即座に飲み干し、
吾郎「くあーっ！もう一杯！」

と、そこへ新たな客が。樋村雄司（26）で
ある。空いているため吾郎の隣に座る。
雄司「すいません、何かいい酒を。今日を最
後にしばらく控えるつもりなので」

店主、新たなコップを雄司の前に置き、
二人に同じ酒を注ぐ。

吾郎、雄司の横顔を見て、

吾郎「おや、たまげた！樋村君でねえの！」

雄司、一瞬吾郎を見てすぐに顔を戻し、

雄司「人違いです」

吾郎「よー、お前さん、年寄りだからって甘
く見ちゃなんねえよ。つい三週間前まで一
緒にいた人間を忘れやしない。」936番、
樋村！“の樋村君だろ？”

雄司、無視して酒を飲み干し、

雄司「ごちそうさまです。お勘定」

と立ち上がるようにする。

吾郎、その袖を掴み、

吾郎「おうおう、いいじゃねえか。ちと付き

合えや。同期のよしみだろう」

雄司（溜息をつき）あなたの場合、歴代大概
の受刑者が同期でしょうが」

○同・外（夜）

月が高い位置にある。

屋台の暖簾下から覗く客の背は二つだけ。

○同・内（夜）

真っ赤な顔の吾郎と雄司。

雄司「ほんつともう金輪際絡んでこないでく
ださいよ？俺、マジでちゃんと生きること
にしたんですから」

吾郎「へえ、ちゃんと？ちゃんとして何だい」

雄司「（表情を引き締め）ちゃんとはちゃんと
です。俺、すごいもんになるんすよ。あな
たには絶対になれない」

吾郎「ほおう、そら見上げたもんだ。医者か
社長か弁護士か」

雄司「(鼻で笑い)そんなもんじゃない。もつと、全然っす」

吾郎「そうか。じゃあ祝ってやらんとな。こは俺が奢っから、たーんと飲めえ！」

雄司「つかプライドないんすか？見下されてるんすよ？」

吾郎「はん、プライドねえ。んなもんあったら、とつくにくたばってら」

とコップの底の酒を飲み干し、ゲツプをする。

○道(夜明け前)

東の空が微かに赤い。

薄暗い一本道に小さな赤い火が二つ。

上機嫌にタバコを吸いながら肩を組んで歩く吾郎と雄司。

○雄司の部屋・居間

古いアパートの一室。

東と南に窓のある角部屋である。

ガーゴリーという音に目を覚ます雄司。

隣で吾郎が大きないびきをかいている。

時計を見ると12時半を過ぎたところ。

雄司「(頭を抱え)俺史上最大の過ち……」

立ち上がり、ザツ、ザツと、二つの窓のカーテンを立て続けに開ける。

吾郎「んー」

と唸り、寝返りを打つ。

雄司、吾郎の傍にかがみ、手のひらで床をバンバンと打ち、

雄司「起きてくださいーい。起ーきーてー」

吾郎、また寝返り。

雄司「922番、田西！起床！」

吾郎、ぱつと飛び起き、

吾郎「おはようございます！……つつ！」

その拍子にまた腰に痛みが。

吾郎の寝ていた辺りの畳には、何やら大きな窪みがある。

吾郎、腰を押さえながらキョロキョロし、

吾郎「なんだい、おちよくりやがって。まっ

たく、年寄りをもっと敬いなさいよ」
とまた横になる。

雄司「敬うに値しない年寄りでしょうが、あなた最も！」

吾郎「まあそう冷たいこと言うない。同士じゃないの」

雄司「ですからね、何度も言ってますけど、俺はあなたとは違うんですよ！」

と吾郎の腕を引っ張り、

雄司「だからほら、さっさと出てって！」

吾郎「あいたた、おいたた……わかった、出てくから乱暴はよしとくれ。(ボソツと)おっかないねえ、近頃の若いもんは」

ゆっくり半身を起こすと、畳の窪みを見下ろし、

吾郎「しかし惜しいなあ。この窪みがこう、腰にジャストフィットしてだな、まるで俺のために用意された寝床のようなんだけどもねえ」

雄司「あ、気に入りました？ここ事故物件なんですよ。そういうとこしか入れなくて。多分、年寄りのいわゆる孤独死なんですけど」

吾郎「ああ……」

雄司「ほら、人って死んで放置すると液化するって言うじゃないすか。だからまあ、言ったら終の寝床なんじゃないすかね、そこ」
吾郎「……どっこらせつと」

立ち上がり、腰の辺りをさりげなく払う。

○同・玄関先

雄司の手に押され、外へ出る吾郎。

雄司「じゃ、まあこれつきりつてことで」

吾郎「水臭いこと言うない。たまには飲もうや」

雄司「(笑顔で) 来世でぜひ！」

ボタン！ドアが閉まる。

吾郎「ふん。一人で飲むわ。飲んでく飲まれ
てくポツクリ逝ってうってな」

ズボンのポケットからくしゃくしゃの茶封筒を取り出し、中を見る。空っぽ。

吾郎「……！」

ドンドンドンドン！とドアを叩き、

吾郎「おい貴様！俺の金どこやった？」

ドンドンドンドン叩き続け、

吾郎「おい、出て来んかい、このコソ泥！」

バン！と勢いよくドアが開く。

雄司「コソ泥はあんただろうが！」

と怒鳴り散らすも、吾郎の姿がない。

我に返る雄司。ふと下を見ると、おでこ

を押さえてしゃがみ込む吾郎が。

吾郎「（見上げ）俺の金……」

雄司「（溜息をつき）覚えてないわけ？自分で

使い果たしたんでしようが」

吾郎、よろよると立ち上がり、手を出し、

吾郎「じゃあ貸して。お医者へ行かんと死ん

でしまう……ううう」

雄司「すいませんけどね、マジあんたみたい

なクズに貸す金なんて一銭もないんで！」

バタン！

閉められたドアの前、ぽつりと立ち尽くす吾郎。

○道

とぼとぼと歩く吾郎。

道沿いのフェンスに掲げられた「貸金」

の看板に目を留める。

× × ×

その看板の前に立ち塞がる吾郎。

やがて、

吾郎「よし、仕事仕事」

とその場を後にして歩きだす。

ガタン！

吾郎の背後、留め具を片方失った看板が

傾く。

ギーギーギーと揺れる看板。

タイトル、出る。

『クズなりに』

○公園

住宅街の中の小さな公園。

砂場や遊具で遊ぶ子供たち、それを見守りながらお喋りする母親らがいる。敷地内に入り、トイレへ向かう吾郎。母親らのお喋りが止まり、吾郎に警戒の目が向けられる。

○同・男子トイレ

入ってくる吾郎。誰もいないことを確認すると、掃除用具入れのドアを開ける。

○住宅街・道

辺りの家々を物色しながら歩く吾郎。右手には針金。指先でよじり、くるくると回す。ズボンのポケットからはゴム手袋が覗いている。

○ベビー用品店

周囲の目を気にしながら店内を歩く雄司。携帯を取り出し、メッセージアプリを起動。"Yuiko"とのトーク画面を開く。

○携帯画面

画面内に表示されているのは全て黄緑色の吹き出し。
"ごめん。俺なりにけじめつけてくる(既読)"
"そんなに長くないと思うから待ってて(既読)"
"お勤め完了！待たせてごめん。仕事決めたら即会いに行く！(既読表示なし)"
"結衣子はまだ××急便で働いてるの？(同)"
"怒ってるの？(同)"

○ベビー用品店

雄司、新たなメッセージを打ち込む。
"もう、どっちかわかった？男？女？"
送ろうとするがすぐに削除し、アプリを終了する。

○倉本家・前（夕方）

垣根越しに家の中を窺う吾郎。
カーテンは閉じている。
吾郎の指先でくるくると回り続けていた
針金が止まり、ピンと伸びる。

○××急便・外（夕方）

両手にベビー用品店の袋を提げ、××急便
の敷地内に入る雄司。
少しおどおどしながら中の様子を窺う。
近くの従業員が話しかける。
従業員「お荷物ですか？」
雄司「や、これはちよつとの間、ここに置か
せてもらっても……」
従業員「はあ。バイトの面接か何か？」
雄司「いや、あの、こちらに――」

○倉本家・玄関前（夕方）

ドアの前にかがむ吾郎。
背後から強い西日が照り付ける。
ゴム手袋を着用した手で、鍵穴に針金を
通す吾郎。匠の眼差し。

○同・内（夕方）

ゆっくりと90度回転する鍵。
音もなく開かれるドア。
その隙間から吾郎の顔がぬつと覗く。
左右を見て、片足を滑り込ませる吾郎。

○同・廊下（夕方）

玄関から真っ直ぐに伸びる廊下。
抜き足差し足で進む吾郎。
その吾郎の背に、何やらピンポン玉大の
丸い虹のような光が揺れている。

○××急便・倉庫内（夕方）

荷物の仕分けが行われる倉庫内。
立ち込める熱気をかき回す大型の扇風機。
その前を横切って歩く三上結衣子（22）。
長い金色の髪が、風に煽られバサッと広

がる。

その後を追う雄司。

雄司「ねえ、ちょっと話聞いてよ」

結衣子、速足で冷凍室へ向かい、ドアを開けて中へ入る。続く雄司。

雄司「ちょ、体冷やしちゃダメだって」

結衣子、ドア際に置かれていた二リットル入り烏龍茶のペットボトルを手に取り、すぐに出てドアを閉める。

ボタン！

また速足で冷凍室から離れる結衣子。

周りの従業員らがちらちらと見る。

冷凍室のドアが開き、雄司が出てきて、鼻をすすりながら結衣子を追う。

雄司「マジごめんって！でも俺、ほんとに心入れ替えてやってこうって決めたんだよね。

結衣子のためにも。それに……」

結衣子、一瞬雄司を睨みつけた後、ペットボトルを思いっきりスイングする。

ゴーン！ガランッ

鉄柱に勢いよく当たり、中の氷が砕ける。

従業員らが一斉に注目する。

雄司、結衣子の肩に手をかけ、

雄司「話聞けって、マジで！これから三人でやってくために俺、金だって」

結衣子「(バツと振り向き)見てわかんない？もうとつくにいないんだって！」

雄司「……」

結衣子「悪いけど、私の人生だから」
立ち去ろうとして振り向き、

結衣子「慰謝料」
手を出す。

雄司「……」

結衣子「てか病院代。結構かかったんで」
雄司、ポケットから通帳と印鑑を出し、

雄司「好きにしるよ」

結衣子、バツと奪い取り、立ち去る。
立ち尽くす雄司。

○倉本家・二階廊下（夕方）

いくつかの部屋のドアが開いている。
そのうち一つのドアから出てきて溜息を
つく吾郎。

吾郎「(ぼつりと) 勘も鈍ったか」
と腰を庇いながら階段を下り始める。
が、すぐに止まり、まだドアの開いてい
ないある部屋を見上げる。

○同・凌空の部屋・前(夕方)

ドアにはポップな書体の水色の文字板が。
「りく」と記されている。
ドアノブに手をかけ、そっと開ける吾郎。
と、中から、

幼児の声「うっ」

吾郎、慌てふためき、手を顔の前にかざ
し、必死に宥めるようにして、

吾郎「悪かった、悪かった。泣くなー、泣く
なよ。君たちや番犬より優秀だ」
手をかざしたまま後退り、ドアを閉めよ
うとする。

女の声「違う！」

その声に、吾郎の足が止まる。
部屋の中の光景を直視する吾郎。

○同・凌空の部屋・内(夕方)

ベッドに寝かされている倉本凌空(2)。
その母・泉美(34)が、ベッド横に膝をつ
き、凌空の顔を枕で覆っている。

泉美、吾郎を見つめ、枕を押さえる手を
離す。

枕をどけて泣きだす凌空。

泉美「……違う、(首を横に振りながら) 違
うです、違う違う違う……」

虚ろな目、濃いクマ、やつれた頬、ぱさ
ついた髪……服だけが不自然に小奇麗で
ある。

吾郎「(あたふたと) ああ、あの、こちらも違
うんですよ、ええ……ただまあ、ああ……」
泉美、少し落ち着き、困惑の視線を吾郎
に向ける。

吾郎「あの……どうも失礼しました」
とドアを出ようとする。

泉美「……返してよ、私の人生」
吾郎の足が止まる。

○雄司の部屋（夜）

暗い部屋の隅に蹲っている雄司。

ピンポン！

ぶつきらぼうに鳴る玄関のチャイム。

無反応の雄司。

ピンポンピンポンピンポン！

連続して鳴らされるチャイム。

雄司、仕方なく立ち上がり、玄関へ。

○同・玄関内（夜）

ドアの覗き穴に顔を近づける雄司。

○同・覗き穴（夜）

レンズいっぱいにつぺりと、あどけない幼児の顔が。

○同・玄関先（夜）

雄司、慌てて鍵を回し、そっとドアを開ける。

凌空と対面する雄司。

と、その後ろから、

吾郎の声「いないいない、」

吾郎、凌空の横にひょっこり顔を出し、

吾郎「ばー！」

雄司「は？……」

吾郎「樋村君、あのな、ちょっと困ったことがあって」

バタン！ガチャツ

ドアを閉め、すぐさま鍵をかける雄司。

居間の方へ戻る。

○同・玄関前（夜）

閉められたドアの前に立ち尽くす吾郎。

その腕の中で泣き出しそうな凌空。

吾郎「任しとけ。必殺技がある」

片手でポケットを探る。

○同・玄関内（夜）

スツと90度回転する鍵。

ドアが開き、吾郎が顔を覗かせ、

吾郎「どうした？電気も点けずに。止められたか？」

雄司、奥からズカズカとやって来て、バチンと壁のスイッチを押して電球を点け、

雄司「何なんすか、あなた。警察呼びますよ」

凌空「うっうっ……わーーーーー」

泣き出す。

吾郎、便乗し、片手で顔を覆い、

吾郎「はーーーーーん」

嘘泣きをかます。

雄司「はあ？マジでもう……意味わかんね。

何なんすかも……ズツ」

俯き、目頭を押さえる雄司。

やがて、堰を切ったように号泣する。

吾郎、凌空、キョトン。

○住宅街（夜）

家々の窓の灯は疎らである。

月は高い位置にある。

タクシーを降り、家に入って行くスーツ

姿の倉本傑（41）。

○倉本家・リビング（夜）

ソファの隅に蹲る泉美。

傑がそれを見下ろし、

傑「なあ、黙ってたらわかんないだろう。どう

いうことだよ？」

しゃがみ、泉美の肩を揺さぶり、

傑「おいどうした？知り合いの家にも預け

たのか？」

さらに強く肩を揺さぶり、

傑「頼むから何とか言ってくれて……まさ

か、攫われたんじゃないよな？」

ぐっと縮こまる泉美の体。

傑「嘘だろう？お前ちゃんと見てなかったの

かよ。母親だろう？何やってんだよ」
泉美、微かに顔を上げ、真っ赤に腫らした目で傑を睨む。

○雄司の部屋・居間（夜）

雄司の腕の中で寝息を立てる凌空。

吾郎、おろおろとそれを覗き込み、

吾郎「寝たか？今度こそ」

雄司「静かに頷き、ひそひそ声で」で、どう
いうことですか？これ」

吾郎「ああ、うーん……ちよつと、なんだ？

預かった、のかな？」

雄司「うっわ、攫ったんすか？どっから？何？
身代金とか要求するわけ？」

吾郎「人聞き悪いこと言うない。預かったん
だ、無償でな！」

凌空がピクリと動く。

雄司「（吾郎を睨み）しっ！」

吾郎、あわあわと凌空の様子を窺う。

眠っているのを確認すると、ふうと息を
つき、

吾郎「俺だって、こんなつもりじゃなかった
んだよ……」

○倉本家・前（夜）

家の前の道に、一台の自動車が停まり、
男女二人が降り立つ。刑事A、Bである。

○同・リビング（夜）

テーブルを挟み、泉美と傑、刑事A、Bが
対面している。

刑事A「この家から攫われたということで間
違いないですか？」

メモを手にも、泉美と傑の両者に訊ねる。
傑、泉美を見る。

刑事らも泉美を見て、

刑事A「奥様はその間ご在宅で……異変に
気づかれたのは大体何時頃でしたかね？」

泉美、俯き、小刻みに震えている。

刑事B「何か、ご覧になられたとか……物

音などは？」

泉美、尚も俯いたまま。

傑「申し訳ないです。ずっとこの調子で……」

刑事 A、B、控えめに顔を見合わせ、

刑事 A「ちよつと……奥様だけお連れして、

個別にお話を伺っても？」

傑「は？私も同席しては？」

刑事 B「いえ、あの、何か話しにくいことも

あるのかもしれないし……」

傑「(刑事らに)何を考えてるんですか！(泉

美に)ほら、今ちゃんとここで話しなさい。

犯人の背格好とか、車のナンバーとか、何

かあるだろう？なあ、何でもいいから話し

なさいって……」

刑事 A「わかりました。では今晚はお二人で

話し合われてください。我々は、不審な電

話などに備えて、どこか別室で待機させて

いただければ。その上で、明朝またお話を

伺わせてください」

傑「そんな悠長なこと……」

泉美の肩をガシツと掴み、

傑「おい泉美、どうして何も言えない？おい」

乱暴に体を揺する。

刑事 A、さつと立ち、傑の腕を掴み、

刑事 A「ご主人」

傑、腕を下ろし、溜息をつく。

○雄司の部屋・居間(朝)

かなりの至近距離で向き合って眠る吾郎
と雄司。

間にくしゃくしゃの布団が一枚あり、互
いにそれを抱くようにして二人の腕が重
なっている。

カラカラカラという音とともに室内に陽
光が射す。

眉間に皺を寄せる吾郎。

目を覚ます雄司。吾郎の顔を間近に見て、

雄司「どわっ！」

吾郎もその声に驚き、

吾郎「ぐはっ！」

二人、光の射す方を見る。

東側のカーテンが上の方で絞られるように束になっており、その裾から小さな足が覗いている。

やがて、そのカーテンがわさりと広がり、
凌空「うわっ！」

屈託のない笑顔の凌空が現れる。

凌空、そのまま二人の間を駆け抜け、南の窓へ向かい、カーテンをぐるぐると体に巻き付け始める。

カラカラという音とともに部屋がさらに明るくなる。

雄司「元氣だな」

吾郎「ああ」

疲れた顔で同時にあくびをする二人。

と、どこからか聞こえてくる童謡のオルゴール音。次第に近づいてくる。

凌空、そのリズムに合わせてカーテンを巻き付けたり広げたりして遊んでいる。

雄司「で、どうするんすか？マジで」

吾郎「ああ、何かと物入りだしなあ」

雄司「は？一緒に暮らす気なんすか？」

吾郎「え、あ、うん……そうなるのかなあ、とりあえずは」

雄司「いや普通に児童相談所に連れてくとかでいいじゃないっすか」

吾郎「どう説明するんだよ？俺俺、こいつの爺さん”とでも言うか？そらちよつと無理があんべえ……樋村君やつてくれよ」

雄司「(イラッと)俺も無理っす。足洗ってるんで。つかもう巻き込まないでくださいよ」

吾郎「んー、(手を出し)じゃあお金貸して。手切れ金だと思って」

雄司「(さらにイラッと)ありません。ガチで今無一文なんで。こっちも色々あるんすよ」

吾郎「じゃあどうするんだよ？」

雄司「知りませんよ。盗んでくりやいいじゃないすか、何でも」

吾郎「それは、なんだかなあ……」

オルゴール音がすぐ下から聞こえる。

凌空、カーテンと窓の間に立ち、
凌空「変な車ー」

雄司「……あ！」

雄司、突如立ち上がり、凌空の立つ窓辺
へ向かい、慌てて窓を開け、

雄司「（下へ向かって）ちよっと待って！そこ
の、変な車！」

○アパート前（朝）

アパート前の道にゴミ収集車が停まって
おり、職員がゴミを回収している。

雄司の部屋の窓を見上げる職員。

雄司と凌空が窓から身を乗り出している。

職員、ベビー用品店の袋を掲げ、

職員「これお宅の？ダメだよ、ちゃんと分別
して指定の袋で出さなきゃ」

雄司「すいません。やっぱ要るんで、置いてっ
てください」

職員、不服げに首を傾げ、車に乗り込む。
去っていくゴミ収集車。

○倉本家・前（朝）

前の道に救急車が停まっている。

玄関から担架に乗せられた泉美が搬送さ
れる。手首に巻かれたタオルには大量の
血が滲んでいる。

× × ×

救急車に乗り込む傑。

見送る刑事A、B。

刑事A「では、我々は後ほど」

傑「ええ。色々にご迷惑をおかけしまして」

ドアが閉まり、発進する救急車。

○雄司の部屋・居間

雄司、ベビー用品店の袋から一つおもちゃ
を取り出し、開封して凌空に渡す。

凌空、受け取るなり、

凌空「ヤーツ！」

と放り投げる。

その他にもあらゆるおもちゃが、そこら

じゆうに散らばっている。

雄司、それらを拾い集めながら、

雄司「あれもイヤ、これもイヤ……（溜息）」

吾郎「君もイヤ、俺もイヤ……（溜息）」

し樋村君、これら一体」

雄司「え？ たまたま捨ててあるのを見つけた
だけですよ」

吾郎「たまたまねえ……よくそれで詐欺がで
きたもんだ」

雄司「ほっといてくださいよ」

吾郎「まあ詮索はしませんよ」

と雄司の肩を軽く叩き、残った紙袋の中
身を確認する。

× × ×

吾郎、オムツを凌空の腰に当ててみる。

吾郎「これじゃ、ちっちゃええか……」

× × ×

雄司、二つのオムツを切って縫って大き
くし、凌空の腰に当てて、

雄司「これでしばらく我慢してな」

× × ×

吾郎、哺乳瓶を取り出し、

吾郎「そういう歳じゃないよなあ……（吸い
口を眺め）よし、これは俺が」

と口に含むとうとする。

雄司、寸前で奪い取り、

雄司「マジで警察呼びますよ」

吾郎「（肩をすくめ）冗談が通じないねえ」

雄司、哺乳瓶と粉ミルク缶を手に台所へ。

× × ×

哺乳瓶のミルクを夢中で飲む凌空。

吾郎「お、いい飲みっぷりだ」

雄司「……母親が恋しいんじゃないすか」

吾郎「（凌空を見つめ）……」

○総合病院・病室

ベッドに眠る泉美。

その傍らに医師、傑、刑事A、B。

医師「命に別状はありませんので。あとは意
識が戻るのを待っていただければ」

傑 「ありがとうございます」

部屋を出る医師。

刑事 A、ドアが閉まるのを見届け、

刑事 A 「倉本さん、あの……これはあくまで可能性としての話なのですが、今回の件、ひよっとすると奥様が息子さんと心中を図って、ご自身は結局」

傑 「ちよつとあなた何を、そんなわけ！」

刑事 A 「ですから、あくまで可能性として」

傑 「可能性も何もないですよ！決して苦勞はさせてませんし。第一、凌空は二人で心から望んで……妻は仕事を辞めて不妊治療までして、ようやく授かった子なんです」

刑事 B 「でも、それから二年以上経ってるわけですよ？その間、倉本さんは全てを見てきたんでしょうか？」

傑 「何が言いたいんです？」

刑事 B 「奥さんもお子さんも人間です。日々関わり合う中で、色んな変化があったと思います。その中に、倉本さんはいらつしやいましたか？少しでも」

傑 「何なんですか、何も知らずに。私だって仕事があるんです。そんな事細かになんて把握できませんよ」

刑事 B 「ですから、」

刑事 A、Bを制し、

刑事 A 「(傑に)とにかく奥様の回復を待って話を聞きましょう。まあ、心の方もだいぶ弱っていらつしやるようでしたので、専門医なども交えながら少し慎重に」

傑 「ちよつと待ってください！攫われたんです、あの子は。今もどこかで怖い思いをして、腹を空かせてるかもしれない。一刻も早く探し出していただかないと！」

刑事 A 「ええ、もちろん、その線でも最善を尽くして動いておりますので」

傑、ベッド横のパイプ椅子にへたり込み、

傑 「どうしてこんなことに……」

無表情の泉美の寝顔。

○雄司の部屋・居間

凌空に継ぎ接ぎオムツを穿かせる雄司。
吾郎「おお、ジャストフィット！しかしまあ、
飲んだらよく出たなあ」

雄司、仕上げのテープを留めながら、
雄司「よしっと。明らかに飲んだ分以上に出
てますけどね」

凌空、オムツ姿のまま駆け出し、ふと天
井の裸電球を見上げ、

凌空「ンパンマ、ンパンマ」

吾郎、雄司も裸電球を見上げる。

吾郎「あん？」

雄司「ああ！」

と携帯を取り出し、動画アプリを起動。
覗き込む吾郎、凌空。

雄司、何やら操作し、

雄司「ほら、これだ」

凌空「ンパンマ！」

雄司の手から携帯を奪い、画面に見入る。

吾郎、その様子をポカンと眺め、

吾郎「はあ……次から次へと忙しいねえ」

雄司、ふうと息をつき、時計を見て、

雄司「あ、やべ」

立ち上がり、そそくさと身支度をする。
最後に凌空が握る携帯に目を向けるが、

雄司「……まいいや。(吾郎に)俺バイト行き
ます。(携帯を示し)それ置いてくんで、あ
と適当に」

と玄関へ向かう。

吾郎「あ、ちょっと樋村君、俺一人じゃその」

雄司、靴を履きながら、

雄司「何言ってるんすか、その子そもそもあな
たの……？まあ今日一現場なんで、できる
だけ早く帰って来ますから」

ドアを開ける。

凌空、携帯画面に目を落としたまま、雄
司に向かって手だけを振り、

凌空「バイバイ」

雄司「(苦笑し)じゃ」

出て行く。

吾郎「おい樋村君！」
ボタンと閉まるドア。

× × ×
携帯画面の円形の矢印（リピートボタン）
をタップする凌空。

動画が始まるとまたそれに見入る。

吾郎、横でそれを見て、

吾郎「飽きないねえ」

× × ×

壁にもたれて座り、うとうとする吾郎。

動画再生中、突如携帯に嚙りつく凌空。

吾郎、慌てて、

吾郎「おーおー、そらうまかねえべ」

と携帯を取り上げる。

凌空「お腹空いた……」

吾郎「ああ、そうか……んー、よし、」

自分の頬を引っ張り、皮をビヨンと伸ばして、

吾郎「僕の顔をおた」

凌空、見向きもせずワツと泣きだす。

吾郎「あー、はいはいはいはい、俺が悪かった。ちよつと待つとけよー」

立ち上がる吾郎。

○同・台所

腰を庇いながら冷蔵庫を開ける吾郎。

中には発泡酒二本と醤油のみ。

吾郎「お」

発泡酒に手を伸ばす。

居間から凌空の泣き声が響く。

吾郎、冷蔵庫を閉め、あわあわとそちらへ戻る。

○同・居間

吾郎、凌空に携帯を握らせ、頭を撫で、

吾郎「いい子だ。いい子だから、もう少ーし

これで我慢できるか？」

凌空「んっ、んっ、んっ」

少し落ち着く。

吾郎、くしゃくしゃと頭を撫で、

吾郎「よし、偉いぞー。おいさんが、ちゃ
ちやつとな、うんまいもん持って来てやる
から、ちーと一人でお留守番しててな」
立ち上がり、玄関へ向かう。
凌空、再び大泣きする。
吾郎、一瞬立ち止まるも振り向かず、玄
関を飛び出して行く。

○スーパー・内

人目を気にしながら店内をうろつく吾郎。
ある棚の前を行ったり来たりしている。
親子連れがやって来る。
吾郎に怪訝な目を向ける母親。
二歳くらいの娘が駆けだす。

母親「ほら、離れなーい」

娘、吾郎のすぐ前の棚から商品を取って
母親の元へ戻り、

娘「これー」

と差し出す。

母親、受け取り、またちらりと吾郎を見
て、

母「ほら、行くよ」

と商品のカゴに入れ、娘の手を取り、去っ
て行く。

吾郎、その場に立ち尽くし、遠ざかるカ
ゴの中のアンパンマンカレーを見つめ、
吾郎「よし」

棚の前を離れ、店の出口へ向かう。

○同・外

自販機の横に置かれた空き缶入れを漁る
吾郎。

○××引越社

車庫に入ってくるトラック。

助手席から降りる雄司。

運転席から降りる中年の従業員。

従業員「腕時計を見て」案外早く片付いたな。
飲み行くか」

雄司「あ、ちよつと俺……すいません、今金

なくて」

従業員「いいって。歓迎会もまだだし、奢ってやるから」

雄司「ああ……や、でも、ちよつと家に、その……」

従業員「え、何？所帯持ちなの？」

雄司「あ、ええ、まあ……」

従業員「なんだよ、そうか。じゃ、しょうがねえや」

雄司の背中をバシツと叩いて、

従業員「色々大変だろう。がんばれ」

と事務所の入口へ向かう。

雄司「あ、あの、」

従業員「（振り向き）？」

雄司「すいません、ちよつとだけ給料前借りつて……」

○靴屋

入って来る雄司。

しばしうろつき、店員を捕まえ、

雄司「あの、子供用のシューズって」

店員「ああ、こちらです」

案内しつつ、

店員「サイズは？」

雄司「ああ……ちよつと……」

店員「お歳は？」

雄司「つと……2歳か3歳か……そのくらいの

男の子なんですが」

店員、苦笑し、

店員「でしたら……」

マジックテープのついたシューズを手に取りる。

○道（夕方）

アルミ缶がぎっしり詰まった大きなゴミ袋を持って歩く吾郎。

背中に汗が滲んでいる。

○雄司の部屋・玄関前（夕方）

靴屋の袋を提げた雄司が、部屋の前まで

やってくる。
中から凌空の泣き声が聞こえる。
慌ててドアを開ける雄司。
居間で泣いていた凌空、雄司と目が合う
なりピタリと泣き止む。
雄司「ただいま」

○同・玄関く居間（夕方）

トイレから転がり出たトイレットペーパーが玄関に落ちている。
それに少し縛れつつ靴を脱ぐ雄司。
その他にも、タオルや靴下などが散乱し、
荒れ果てた室内。

雄司、ズカズカと居間へ向かい、
雄司「おいコソ泥！子供に何仕込んでんだよ」
見渡すも吾郎の姿はない。

凌空が駆け寄り、雄司の脚にしがみつく。
雄司、靴屋の袋を床に置き、凌空を抱き
上げ、

雄司「ずっと一人だったのか？」
また泣きだしそうな凌空。

雄司、背中をさすりながら、
雄司「よしよしよしよし……もう大丈夫だからな」
改めて室内を見渡す。

携帯が隅に転がっている。

○スーパー・内（夜）

レジに並ぶ吾郎。

○雄司の部屋・居間（夜）

わんわん泣いている凌空。
雄司、時計を気にしつつ、
雄司「よし、あと5分待って帰って来なかったら、二人で飯食い行こうな」
と、ガチャツ

二人、玄関を見る。
ドアが開き、小さなレジ袋を提げた吾郎
が入ってくる。

凌空「（泣き止み）あ」

吾郎「(凌空に)ばー！(雄司に)おお樋村君、帰ってたか」

雄司「帰ってたかじゃねえよ！どこ行ってたんだよ、こんなちっちゃい子ほったらかして！」

吾郎、部屋へ上がりつつ、

吾郎「やあ、腹が減ったって言うからさ……」

雄司、吾郎の手からレジ袋を奪い、中のものを取り出す。

雄司「で、これ？」

出てきたのはシーチキンの缶詰一つ。

吾郎「……(視線を逸らす)」

雄司「(迫り)何時間もほっつき歩いて、これ一つっすか？」

吾郎「だってそれくらいしか買えなかったんだもんよ……」

雄司「は？買う？」

缶詰に興味を示し、手を伸ばす凌空。

吾郎「ほれ、食いたがってんじゃねえかよ」

雄司「や、買うって何だよ？あんた、いくらでもっとマシなもん盗んで来れんだろ」

吾郎、雄司の手から缶詰を奪い、凌空前にしゃがんで手渡す。

凌空、両手で受け取り、

凌空「ありがとう」

吾郎「(微笑み)盗んだもんなんかよ、食わせらんねえだろう」

雄司「は？」

吾郎「よくねえだろ、やっぱそういうのは。

この子のために」

雄司「(見下ろし)……違うだろ。それプライドのためだよ、あんた自身の。ほんとにこの子のことと思うんだったらさ、盗んでも何でも、とっとと帰って来て、もっとちゃんとしたもん食わせるだろうがよ」

吾郎「(見上げ)……」

雄司「何かツッコつけてんだよ、今更。クズが」

吾郎、立ち上がり、

吾郎「……」

とぼとぼと玄関へ向かう。

雄司「おい、どこ行くんだよ」

吾郎、振り向き、凌空に向かって笑い、
吾郎「5分待つとけ。うんめえもん、たんまり食わせてやるからな」

雄司、引き止め、

雄司「ちよ、いつすよ。俺、給料前借りして来たんで。今日はとりあえず、これ食いましょ。白飯はありますんで」

× × ×

段ボール箱の即席食卓を囲う三人。

それぞれの前に、白いご飯の盛られた茶碗、皿、タッパーが。

そして真ん中に、蓋を取っただけのシーチキン缶。

凌空はスプーンを使い、不器用ながらも黙々とご飯を口に運ぶ。

凌空のタッパーのシーチキンがなくなると、吾郎が缶から取り分ける。

吾郎「気に入ったか？」

凌空「これ何？」

吾郎「ヒーチキン」

ちらりと吾郎を見る雄司。

凌空「(雄司に) ヒーヒキンって？」

雄司「ん？ああ、お魚だね。海の」

凌空「(吾郎に) 海？」

吾郎「海っちゃ、広くて大きいところだ」

凌空「(二人を交互に見て) お空より？」

吾郎、雄司、しばし顔を見合わせ、

吾郎「お空と…：同じくらいか？」

雄司「ま、そんなもんじゃないすか」

凌空「お空と同じ」

納得がいった様子で、また黙々とご飯を食べる。

○同・台所(夜)

洗い物をしている雄司の元へ凌空がやって来て、

凌空「お風呂どこー？」

雄司「ああ、これ終わったら行こうな」

凌空「？」

雄司「俺の風呂デカすぎて、家ん中入んなかったの。だからちよつと離れたところにあるんだよ」

言いつつ、シーチキンの缶をざつと洗い、ゴミ箱へ捨てようとする。

凌空「あ、りっくんの」

雄司「(缶を見せ) これ？」

凌空「お茶碗」

雄司「何？これ茶碗にすんの？いや……もつとちゃんとしたの買ってやるから」

とまたゴミ箱へ捨てようとする。

凌空、その手を掴み、

凌空「りっくんの」

こつそり居間から覗き見ている吾郎。

雄司と目が合い、

吾郎「(慌てて) まかし) 便所、便所」

とトイレへ向かう。

雄司「まあいいや。飽きるまで使いなさいよ」

と食器用洗剤を使って缶を洗う。

満足げに見上げる凌空。

吾郎、その様子を見てほくそ笑み、トイレに入る。

○同・玄関先(外)

凌空が玄関に座っている。

吾郎はタオルやシャツなどが入ったビニール袋を持ち、ドアを開けて待っている。

雄司、白い箱を持って居間から出てきて、

雄司「ほら」

と凌空にシューズを見せる。

凌空「わあ」

雄司、凌空を抱き込むようにして座り、片足に履かせてみる。

だがブカブカで落ちてしまう。

吾郎、それを拾って凌空の足に被せ、

吾郎「すぐに大きくなるんだろうから、これくらいがちょうどよかんべ」

雄司「(苦笑し) にしてもデカすぎましたね」
もう片方にも履かせて、マジックテープ

部分をギリギリまで巻き込んで留める。

○銭湯・浴場（夜）

湯船に浸かる三人。

縁のすぐ下の段に座って首から上だけを出している凌空を頂点に、三角形を成すような位置関係である。

吾郎「はあく、たまらんねえ」

凌空「たまらんねえ」

雄司「たまらん：：すけども、」

斜め前の水面に目をやる。

吾郎の左右の親指が立てられている。

雄司「（吾郎に）あの、」

吾郎「へ？」

雄司「ここ娑婆ですし、俺別にあなただのことそっちだと思っただけで、普通に浸かってもらえます？」

吾郎「え？ああ」

静かに沈む吾郎の親指。

凌空が退屈そうに口を湯につけ、

凌空「ぶぶぶぶぶぶぶぶ」

雄司「こーら、変な遊びしないの」

凌空の頬を掴んでぐいと持ち上げる。

凌空「（ふてくされ）ぶー」

口からよだれ混じりのお湯を吐き出す。

雄司「こら、ちゃんとしないと怒るぞ」

凌空、ぷいとそっぽを向く。

吾郎、不穏な空気を察し、両手で筒を作り、

吾郎「シャバー、シャバー」

と凌空にゆるめの水鉄砲を喰らわす。

凌空「きゃ」

笑顔になる。

一人面白くなさそうな雄司。

吾郎「シャバてつぽう！」

と雄司にも強烈な水鉄砲を喰らわす。

雄司「ちよ」

吾郎「シャバてつぽう！シャバてつぽう！」

凌空と雄司に交互にお湯を飛ばす。

雄司「あーもー、シャバシャバシャバシャバ

シャバてつぼう！」

凄まじい勢いで応戦。

凌空、きゃっきゃと喜んでいる。

周囲の客が捌けていく。

× × ×

夢中で水鉄砲を練習する凌空。

雄司、その様子をぼんやりと見ながら、

雄司「さっきのこと、すいませんでした。ちよつ
と言い過ぎました」

吾郎「(凌空に) おい、謝られてるぞ」

耳に入っていない様子の凌空。

雄司「田西さんに言ってるんすよ」

吾郎「え？何？」

雄司「いや、ほんと俺もわかるんすよ。そ
の、子供の前でしょうもない大人ではいた
くない気持ち」

吾郎「ああ…：しかしまあ、樋村君はしょう
もない大人なんかじゃないぜ？」

雄司「(笑い) あなたに言われてもなあ…：…」

吾郎「なんだい、人がせつかくよお」

雄司「(真顔になり) や、でも、うん。そんな
ことより、もつと大事にしなきゃいけない
ことがあるって、なんかわかりました。つっ
ても、もう遅いんでしょうけど…：…」

遠い目で凌空を見る。

吾郎「何も遅いことなんかあるかい。そんな
に若くて」

雄司「あるんすよ、色々。若いなりに」

雄司、凌空を抱き上げ、立ち上がり、
雄司「(吾郎に) 出ますよ、俺ら。気を付けて
くださいね。風呂で死ぬ年寄り、年間一万
人以上いるらしいんで」

湯船を出て行く雄司と凌空。

吾郎「ふん。まだまだくたばらんわ」

そこへ少し離れたところに浸かっていた
老人が寄って来て、

老人「お孫さんと曾孫さんで？」

吾郎「は？ああああ、ええ」

老人「いいですねえ。うちなんて、勝手気ま
まな娘も気づけば⁵⁰。孫の顔すら拝めずじ

まいですわ」

吾郎「はあ、そんなにおっきな娘さんが」
老人「(はははと笑い)おっきな。いやほんと、
こつちが老いぼれるほど、態度はどんどん
おつきくなっていけますけどねえ。しかし
まあ、そんなんでもね、私もこの歳まで大
きな病気もせんで、あっちもあっちで元氣
にやっつてんだから、そんだけでも感謝しま
せんとねえ」

吾郎「ほんとですよ」

カラン…

湯気の向こうにぼんやりと、体を流し終
え、出口へ向かう雄司と凌空の姿が。

○同・脱衣所(夜)

浴室から出てくる吾郎。

ちようど雄司と凌空が身支度を終えたと
ころであった。

雄司、ふやけた吾郎を指し、

雄司「(凌空に)おぼけが出たぞー」

凌空「ふにやふにやおぼけー」

吾郎「なんだとー」

と二人のもとへ駆けて行く。

が、少しよろけ、雄司の肩に掴まる。

雄司「ちよつとダメっすよ、風呂上がりに興
奮したら。マジで死にますよ」

吾郎、体勢を立て直し、

吾郎「余計なお世話だ」

雄司「ま、ゆっくりしてってください。俺ら
先行ってますんで」

吾郎「あい。俺もすぐ行く」

○アパート前(夜)

雄司と凌空が手を繋ぎ歩いて来る。

たどたどしく歌う凌空。

雄司もふんふんと鼻歌を乗せる。

凌空「きらきら光る お空の星よ まばたき
しては」

ふいに雄司の鼻歌が止み、足も止まる。

雄司の顔を見上げる凌空。

前方を見て、瞬きする雄司。

アパートの外階段に結衣子が座っている。

雄司「なんで」

結衣子「立ち上がり、近づいて来て、

結衣子「お荷物です」

と薄い小包を手渡す。

雄司「え」

結衣子「お宅宛てのがあったんで、ドライバー

さんに乗っけて来てもらった。電話したよ

ね？昼間。変な声しかなかったけど」

雄司「電話？昼間？…あつ」

携帯を取り出し、確認する。

結衣子を含む複数人に発信した履歴が。

雄司、凌空を見て、

雄司「お前…」

凌空「視線を逸らし、空を見て」まばたきし

ては 皆を見てる きらきら光る…」

結衣子、凌空を見て、

結衣子「てか他で作ってんじゃない」

カバンから通帳と印鑑を取り出し、

結衣子「これも返す。大変でしょうから。何

かと」

雄司「は？え？」

咄嗟に凌空の手を離し、

雄司「いやいや、違うって、この子は。え？

違うよ？（凌空に）違うよな？なあ？」

凌空、黙って雄司の手を握り直す。

結衣子「バカにすんのもいい加減にしてよ！

せいぜい大事にしなよ！」

と雄司に通帳と印鑑を押し付け、速足で

去る。

地面に落ちる通帳と印鑑。拾う凌空。

雄司「（振り返り）ほんと違うって！ありえな

いじゃん！待ってよ、結衣子！（大声で）

マジで絶対俺の子じゃない！」

立ち止まる結衣子。

と、その先に吾郎の姿が。

凌空、雄司の手を離し、

凌空「おばけ来たー」

と結衣子を追い越し、吾郎の元へ。

吾郎、凌空を受け止め、結衣子と雄司を見て、
吾郎「えっと……お取り込み中だったかしら」
結衣子、雄司を振り返る。

○公園（夜）

公園の片隅のブランコ。

雄司と結衣子が並んで座っている。

他には誰もいない。

雄司、先ほどの薄い小包を差し出し、

雄司「これ……結衣子に」

結衣子「は？」

雄司「前に観たいって言ってた映画あるじゃん？そのDVD。俺が出頭しちゃって一緒に行けなかったから、お詫びっつか……」

結衣子、受け取らず、

結衣子「どうでもいいよ、もう。そんなん」

雄司、引っ込め、

雄司「……そっか」

結衣子、呆れ返って笑いだし、

結衣子「何でもそうやって、後から取り返しがつくと思ってるわけ？」

雄司「思っ……た」

結衣子の顔から笑みが消え、

結衣子「たって何よ？」

雄司「自分のことしか考えてなかった。全部俺の都合で、自己満で始めとか言っ……
：もう、俺だけの問題じゃなかったのに」

結衣子「（俯き）ほんとだよ」

雄司「（も俯き）……ね」

結衣子、キーキーと小さくブランコを揺らしながら、

結衣子「……墮ろしてないよ」

雄司、結衣子を見る。

結衣子「墮ろそうと思っただけど、できなかつた」

雄司とは反対側の頬を静かに涙が伝う。

結衣子「でも結局、流れちゃったんだ。すごい悲しかった……けど、」

ブランコがぴたりと止まる。

結衣子「けど……同じくらい、安心した」
雄司「……」

結衣子、やりきれない笑みを浮かべ、
結衣子「安心したの。……安心しちゃったんだよね」

両目からボロボロと涙が溢れだす。

雄司「……ごめんなさい」

その頬にも涙が。

雄司「……一人にして、ごめんなさい」

× × ×

それぞれのブランコで、声を上げて泣く二人。

○総合病院・病室（夜）

ベッドに眠ったままの泉美。

その傍らに座る傑。

泉美の左手を取り、包帯の上から手首をさすり、そのまま手を撫で、指先へ。

と、薬指から指輪がすわりと抜け落ち、ピン……傑の足元に転がる。

傑、改めて泉美の顔を見る。げっそりとこけた頬が目につく。

傑「……」

泉美の左手をぎゅつと握り、さらにもう片方の手も添えて包み込む。

○雄司の部屋・玄関先（夜）

静かに玄関のドアを開ける雄司。

電気が点けっぱなしの居間から、吾郎のいびき、凌空の寝息が聞こえてくる。

○同・台所（夜）

水を飲む雄司。目元が赤い。

ふと見ると、シンク横に通帳と印鑑が置かれている。

雄司「（呟く）くすねなかったか」

○同・居間（夜）

吾郎が凌空を抱え込むようにして眠っている。

雄司、電気を消し、横になる。

凌空の頬に蚊が止まる。

雄司、手でそっと払ってやる。

吾郎「んー」

吾郎の手が凌空の体から離れる。

シャツのめくれた脇腹を掻きむしる吾郎。

雄司、凌空の体にそっと手を添え、寝顔を見つめる。

吾郎「(寝言) ……いい子だ」

凌空の体と雄司の手の上に、ガバツと吾郎の腕が重なる。

吾郎「(寝言) ……皆いい子だ」

雄司、唇を固く結び、身を縮める。

○総合病院・病室(朝)

パイプ椅子に腰かけ、疲れた表情でベッドに眠る泉美を見つめる傑。

サイドテーブルの上に置かれた指輪を取り、泉美の左手薬指に通す。

傑「…：信じていいよな？」

泉美の手をベッドの上に戻し、自分の手をそっと重ねる。

傑「信じたい」

すっと立ち上がる。

○総合病院・前(朝)

タクシーに乗り込む傑。

○走るタクシーの中(朝)

傑、携帯を耳に当て、

傑「ええ、申し訳ないんですが、ちょっと、

あの…：息子が急病で…：や、妻もいる

んですが、今は私も付いていたくて…：

ええ、先方には後日私の方から…：」

○雄司の部屋・居間(朝)

部屋の真ん中で、雄司が一人体を丸めて眠っている。

カラカラ、カラカラという音とともに室内が明るくなる。

雄司、横たわったまま体をぐっと伸ばし、雄司「まったく、ガキとジジイは朝が早いな」東の窓のカーテンの下には小さな足、南の窓のカーテンの下からは皺だらけの足が覗いている。それらの動きに合わせて、吾郎と凌空の歌声が重なる。

二人「カーテン巻き巻き カーテン巻き巻き ひーてひーて トントントン」

大きく飛び跳ねる小さな足。

直後、ブチッ！

カーテン上部のフックが弾け飛び、雄司に直撃する。

雄司「(ガバッと起き)こらっ！」

凌空「きゃー」

笑って駆け出し、吾郎のカーテンの中に避難する。

○倉本家・前(朝)

タクシーを降り、玄関へ向かう傑。

○同・玄関前(朝)

鍵を開けようとする傑。

が、妙に引っかかりスムーズに開かない。

傑、二、三回鍵を抜き差ししてみた後、鍵穴を指でなぞる。

指先に何か違和感を覚え、鍵穴をよくよく観察する傑。

○同・玄関内(朝)

玄関に立ったまま、携帯を耳に当てて話す傑。

傑「ですから、こちらも可能性として……とにかくもう一度、きちんと調べていただけますか？」

○雄司の部屋・居間

段ボール食卓の真ん中に、タッパに盛り込まれた野菜炒めが。

雄司、凌空のシーチキン缶のご飯の上に

野菜炒めを取り分ける。

凌空、そこからニンジンをつまみ出し、ポイと投げる。

それがペタッと雄司の腕に貼り付く。

雄司「好き嫌いしない」

とニンジンをつまみ出し、戻す。

凌空、缶ごと食卓に置き、食べることを拒否。

吾郎、その様子を横目で見ながら、自分の皿に野菜炒めを取り、ピーマンだけをそっとタッパーに戻す。

じつと見る雄司。凌空も見ている。

吾郎「(凌空に) 交換すべえか、そっちのニンジンと俺のピーマン」

雄司「あなたねえ」

凌空、黙ってシーチキン缶を手に取り、ニンジンをつまみ出し、口に運ぶ。

それからよく噛んで飲み込み、

凌空「ばー！」

と吾郎に向かって口を開けて見せる。

吾郎、何も無い凌空の口の中を見て、

吾郎「……恐れ入りました」

と箸を伸ばし、タッパーからピーマンを取って口に含む。

雄司「はい、二人ともいい子」

二カツと笑い、どンドン食べる凌空。もごもごと口を動かさず、涙目の吾郎。

○倉本家・凌空の部屋（夕方）

若い鑑識官がベッド周りを調べている。

ドアの外で見守る傑と刑事A、B。

鑑識官、布団の上から何かをピンセットで摘み上げ、密閉袋に採取する。

鑑識官、刑事A、Bの方を向き、それをかざして、

鑑識官「白髪です。短い」

身を乗り出す傑。

○銭湯・浴場（夜）

凌空を頂点とした三角の位置関係で湯船

に浸かる三人。

ついに水鉄砲を体得した凌空。

凌空「シャバー！シャバ！」

得意げに吾郎と雄司に喰らわせる。

吾郎、雄司もこれに応戦。

三人「シャバてっぽう！シャバてっぽう！シャバてっぽう！」

合戦に夢中で周りが見えていない三人。

そこへ極道風の中年男がやって来て、

中年男「おいこら己ら！ここはなあ、皆のお風呂なんじゃい。最低限のルールは守らんかい！」

一斉に縮み上がる三人。

湯船に踏み入る中年男。

凌空、その背中と浴場の壁の絵を見て、

凌空「おんなじー」

中年男「イカすだろー？」

と凌空を振り返り、湯に浸かる。

吾郎と雄司も中年男の背中を見る。

一面に立派な富士の刺青が。

その先にぼんやりと「刺青の入ったお客様、固くお断り」という看板が見える。

と、ゴロゴロ…ピカッ！

高い位置にある窓から稲光が。

凌空「(耳を塞ぎ) わー！」

中年男「こりゃあ、まとまったのが来るなあ」

雄司「あ！うちの窓！」

と慌てて凌空を抱き上げ、湯船を出る。

吾郎「戸締り、戸締り…」

と雄司に続く。

中年男、その吾郎の足取りを見て、

中年男「おお、あんた！ひよつとして、伝説のコソ泥・田西吾郎じゃないか？」

振り向く吾郎。

雄司「(凌空に) お友達は選ぼうねー」

などと呟き、吾郎を置いて出口へ急ぐ。

凌空、中年男に対し無邪気に手を振る。

× × ×

並んで湯船に浸かる吾郎と中年男。

同じ浴槽に他の客の姿はない。

中年男「やあしかし、娑婆であんたに会えるなんて滅多なことじゃねえ。そら大雨も降るわなあ（と豪快に笑う）」

吾郎「ええつと……」

中年男「俺があんたと同期だったのは、随分若い頃でさ、まだ（背中 of 刺青を指し）これもなかつたから、覚えてなくて当然だよ」

吾郎「ああ。そうでしたか。いやしかし失敬」

中年男「いやいや、こちらもなんだか悪かったね。その、水入らずんとこに。にしても、あんたみたいいな男にも家庭がねえ……」

吾郎「へへっ、そう見えるかい？」

中年男「他人には見えないぜ？孫と曾孫辺りなんじゃないの？」

吾郎「んなもんいるわけなかんべ」

中年男「じゃあ何なんだい？」

吾郎「何だろうなあ……まあ、ちと珍しいもんを盗んじまったってどこかねえ」

中年男、ふんと笑う。

○同・脱衣所（夜）

浴場から出てくる吾郎。

身支度を終えた雄司と凌空がいる。

雄司「すいません、また先きますね」

吾郎「あいよ、お構いなく」

雄司「降りだしちゃったら傘持って来ますんで、ちよつと待っててくださいね」

と凌空を抱えて慌てて出て行く。

吾郎「（雄司の背に）なーに大丈夫だ、俺は、雨くれえ。生まれてこの方、風邪なんてひいたことねえんだからよ」

いつの間にか吾郎の横に刺青の中年男が。

中年男「ああいうもんは、盗んで手に入るもんじゃねえだろう」

吾郎、照れたように笑う。

○雄司の部屋・玄関く居間（夜）

二つの窓から雨が吹き込んでいる。

凌空を抱え、慌てて駆け込んでくる雄司。

×

×

×

凌空にバスタオルを被せる雄司。

窓を閉める雄司。

ビニール傘を二本携え、靴を履き、
雄司「すぐ戻るから、お留守番頼むな」

居間で窓の外を見ている凌空。

○道（夜）

豪雨の中、傘をさし走る雄司。

風に煽られ、さしていた傘が壊れる。

雄司、それを畳んでもう一本の傘を開く。

と、前方に既にずぶ濡れで歩く吾郎が。

雄司「ちよつともー、待っててくださいって
言ったじゃないすかー」

吾郎「大丈夫だって言ったじゃねえか」

相合傘をして歩く吾郎と雄司。

吾郎、両腕を前に伸ばし、親指を立てて
いる。

雄司「だから、それ結構ですから。つか、も
はや風呂でもないし」

吾郎、腕を下ろし、

吾郎「だって、こう優しくされちまうと、俺、
お前さんのこと好きになっちゃいそうなん
だもんよお」

雄司「ちよ、キショ！」

咄嗟に距離をとる雄司。濡れる吾郎。

吾郎「キショって何だい」
と雄司に寄り添う。

雄司「それっすよ！気色悪いって話。勘違い
しないでくださいよ？あの子がいるから、
しょうがなく置いてるだけっすからね。と
りあえず」

吾郎「ふん、わかつとるわ」

雄司「けどほんと、いつまでもこのままって
わけにはいかないっすよね……」

一つ傘の下、黙ってとぼとぼと歩く二人。

○雄司の部屋・玄関先（夜）

雄司と吾郎、玄関のドアを開け、
二人「ただいまー」

が、凌空の返事はなく、居間から激しい
風雨の音が。

○同・居間（夜）

慌てて駆け込んでくる雄司。

東側の窓が開いており、凌空が身を乗り
出し、外に手を伸ばしている。

雄司「おい！」

駆け寄り、凌空の体を抱え、窓を閉めよ
うとする。

凌空、窓の格子に手をかけ、抵抗し、

凌空「ちようちよいるの！」

吾郎、凌空の横へやって来て、外を見て、

吾郎「おお、羽化か」

雄司「え？」

見ると、蛹から羽化したばかりの蝶が。
風に吹かれながらも、柱にしがみつ
き、柔らかく縮れた羽を乾かしている。

凌空「さつき出てきたの。お家から」

吾郎「おお、出てくるところ、見ててやっ
たのか？」

凌空「うん！固いお家からビキって出てきて」

吾郎「ほう、そらすごいなあ」

雄司「おっし、それ見たら十分だ。あとは飛
んでくだけだから、おやすみなさいして寝
ような」

と凌空の手を格子から離させようとする。

凌空、頑なに踏ん張り、

凌空「濡れちゃうから飛ぶまで手で傘するの」

雄司「自分だって濡れちゃうだろう？」

凌空「りっくんは平気。強いもん」

顔を見合わせる雄司と吾郎。

× × ×

蝶を囲う三人の手。

○同・居間（明け方）

蝶を囲う吾郎と雄司の手。

凌空は二人の間で眠っている。

雄司「(あくび混じりに)なんでこう、弱いものって、無条件に守りたくなっちゃうんすかね」

蝶の羽はもう大分しつかりしている。

吾郎「根があんまり強いんで、放っておけなくなっちゃうだけじゃないかね。見てるとこつちが励まされるもんだから」

凌空に目を落とす吾郎と雄司。

と、蝶が二人の手を掠めて飛び立つ。

見送る吾郎と雄司。

雨上がりの朝焼けに目を細める。

○総合病院・病室(明け方)

窓際に立ち、雨上がりの空を眺めながら缶コーヒーの蓋を開ける傑。

そのカコツという音に反応し、ベッドに眠っていた泉美が目覚めます。

泉美、しばし視線だけを動かし、状況を把握する。

窓際の傑の背を捉えようと、目を動かすのをやめ、半身を起こそうとする。

傑、その衣擦れ音に振り返る。

駆け寄り、泉美に手を添える。

傑「よかった。大丈夫か？」

泉美「……凌空は？」

○雄司の部屋・居間(朝)

川の字で眠る三人。

携帯のアラームが鳴る。

目覚めてそれを止め、半身を起こす雄司。

凌空「んー」

寝返りをうち、雄司の手に触れる凌空。

雄司、はっとし、凌空のおでこに手を当てる。

雄司「(焦り)ちょ、え？おい！」

凌空、目を覚めますも、頬を赤らめ、ぐつたりした様子。

目を覚ました吾郎、寝ぼけ眼で、

吾郎「ん？どうした？」

凌空「……ちようちよは？」

○総合病院・病室（朝）

ベッドに座る泉美。傍らに傑。

刑事A、Bがメモを取りながら泉美の話を聞いている。

泉美「主人の言う通り、鍵を開けて入って来たみたいで」

刑事B「年齢はだいたい？」

泉美「かなり、年配の方だったと思います」

刑事A「では、空き巣に入ったその男が、金品の代わりに凌空君を攫って行ったと？」

泉美「いえ……攫われたと言うのとは……」

刑事B「もしかしてお知り合いの方で？」

泉美「いえ、全然知りません。ただ……」

傑「言いたくないことがあるなら、無理しなくともいい」

泉美「（傑を見た後）……なんとなくですけど、

悪い人ではなかったと思うんです」

刑事A「じゃあどういった目的で凌空君を？」

泉美「（視線を逸らし）それは……」

顔を見合わせる刑事A、B。

○道（朝）

幼稚園の送迎バスが停まっており、幼い子供を連れた母親らが列を成している。

吾郎が少し離れたところからその様子を観察しており、凌空とよく似た背格好の男児を見送る母親に目を付ける。

× × ×

遠ざかっていく送迎バス。

その場で井戸端会議を始める母親ら。

いかにも年寄りらしく腰を曲げ、覚束ない足取りで近づく吾郎。

○小児科・前の道（朝）

女ものの財布を片手に、全力疾走でやって来る吾郎。

その視線の先には、ぐったりとした凌空を負ぶった雄司の姿が。

吾郎、息を切らしながら財布から保険証
を抜き取り、雄司に手渡し、
吾郎「あとは頼んだ！」

○同・診察室

雄司に付き添われ、診察を受ける凌空。
医師「はい、じゃあ拓哉君、あーんして」
雄司の顔を見る凌空。

雄司「あーんだって、あーん」

看護師「あーんは？拓哉君」

雄司「ほら、あーん。できるだろ？」

医師「すぐだから、拓哉君」

看護師「怖くないから、拓哉君」

雄司「そうだぞ、…拓哉」

凌空「？…りっくんだよ」

医師「ん？拓哉君だよね？」

看護師「（カルテを確認し）拓哉君ですね」

凌空「りっく」

雄司（遮り）俺俺、俺っす！妻が俺のことそ
う呼ぶんで、近頃こいつも真似して…
笑ってごまかす雄司の横で、凌空は頬を
膨らまし、

凌空「りっく」

雄司、咄嗟に凌空の頬を掴み、

雄司「あーん！」

大口を開けさせられる凌空。

○同・受付

カウンター越しに処方箋を受け取る雄司。

看護師「お大事にどうぞ」

× × ×
看護師、出て行く雄司と凌空の背を見送
り、扶養保険証のコピーに目を落とす。

○同・前

病院前でうろろしながら待つ吾郎。

出てくる雄司と凌空を見るなり駆け寄っ
て来て、

吾郎「どうだった？重い病気じゃなかんべな？」

雄司「(額に手を当て大げさに溜息をつき)終
わったー、完全に終わったわ、あれは……」
吾郎「おい、冗談だろ？どこか悪いなら、胃
でも肺でも心臓でも、俺のをいくらでもく
れてやるぞ！」

雄司「や、風邪っすよ、ただの」

吾郎「(ほっと息をつき)なんだ、脅かすなや」

雄司「(凌空に)つかお前さー、空気読めよマ
ジで」

凌空「(膨れっ面で)りっくんだもん」

吾郎「(凌空と雄司を交互に見て) んん？」

雄司「(凌空に)いや、りっくんかもしんねえ
けどさ、嘘も方便って言うだろうがよ……」

凌空「りっくんは、りっくんだもん！」

雄司「(軽く舌打ちし)ガキに言ってもしよ
うがないか」

凌空「りっくんだもん……」

吾郎「まあ、何があったか知らないが、嘘は
よくないぞ、うん。嘘つきは泥棒の始まりっ
て言うくらいだからな」

雄司「(呆れ)バカ正直な泥棒しか知らないっ
すけどね」

凌空、雄司の元を離れ、吾郎にしがみつ
く。

雄司「ま、ちゃんと食わして、寝かせときゃ
治るって話なんで、あと頼みますね」

去ろうとする雄司。

吾郎「おい、どこ行くんだ？見捨てる気か！」

雄司「(イラッと振り返り)バイトなんで！」
去って行く雄司。

○総合病院・病室

ぼつりぼつりと言葉を紡ぐ泉美。

静かに頷きながら聞いている傑。

泉美「……そういう時期だってわかってるん
だけど、話そうとしたって、全部泣き声で
遮断されて。そういう一対一の世界で、こっ
ちの方が理性を保てなくなってる……なんだ
かも、私にはこういうの向かないんだっ
て、根本的に間違ってたような気がして……」

：だから、私、凌空を……」

○道

凌空を負ぶって歩く吾郎。
交番の前にさしかかり、少し速足になる。
が、「パトロール中」という看板に目を
留め、立ち止まる。

○総合病院・病室

泉美、俯き、涙し、

泉美「……ごめんなさい」

傑「俺こそ、悪かった。よく話してくれた」
号泣する泉美。

傑、泉美の肩に手を置き、目を見て、

傑「もういいから。凌空がもし無事に帰って
来てくれたら、やり直そう？」

泉美「(震えながら)私、繰り返すと思う。そ
れで……いつかは本当に凌空を」

傑「(遮り)そんないつかは来ない。これから
は俺もできるだけ傍にいるから。一緒にい
られないときに辛いことがある、後から
俺にぶつけてくれていい。何話しても大丈
夫だから。一人にしない。だから、やり直
そう。やっつけていけるよね？」

泉美「……わからない。凌空はきつと、私を
もう……」

○雄司の部屋・台所

湯気の上がる鍋の前に立つ吾郎。

おたまで鍋からお粥を掬い、シーチキン
缶いっぱい盛る。

○同・居間

凌空にお粥を食べさせようとする吾郎。

凌空「自分でやる」

吾郎からスプーンを奪い、大口で食べる。

吾郎「どうだ？うまいか？」

凌空「ふっう」

と小さく掬ってまた口に含む。

吾郎「……ん。偉いぞ。正直者が一番偉い」

凌空「食べる？」

と大きく掬って吾郎に差し出す。

吾郎、あーんと食べ、

吾郎「ふつうだ。うん、ふつうだ」

凌空、また自分で食べ、

凌空「ふつう。ふつうが一番」

言いながら笑みをこぼす。

吾郎「おお、何だよ。ガキンちよのくせして、

妙に意味深じゃないの」

凌空「お母さんが言ってた」

吾郎「……」

○××引越社（夕方）

トラックの運転席から降りる従業員。

頭を下げる雄司。

雄司「すみませんでした」

従業員「いいよ、荒井君来てくれたし」

雄司「（立ち塞がり）すみません。本当に」

従業員「（押し退け）いいって。明日も大丈夫

だから。荒井君にお願いした」

雄司「すみません」

従業員「（振り向き）あのね、すみませんで済

んだら警察いらさないの。給料前借りして働

かないんじゃ、それ君、詐欺でしょ。根は

真面目だと思っただけだね」

雄司「……俺、必ず、しっかり働きますんで」

従業員「もういいって言ってるだろ！なあ樋

村君、どうして俺や世の中の多くの人間が、

こんなに必死で働いてるかわかるか？」

雄司「……」

従業員、手慣れた様子でトラックを点検

しながら、

従業員「代わりがきかないからじゃない。い

くらでも代わりがきくことだから、人に取っ

て代わられないようにって、皆必死で喰ら

いついてんだよ。そろそろわかったってい

い頃だろう」

何も言えず、その背を見つめる雄司。

○雄司の部屋・居間（夜）

きやつきやと駆け回る凌空。
顔や体にトイレットペーパーを巻き付けた吾郎が追いかける。

吾郎「おばけだぞー」

玄関のドアが開く。

雄司、一步踏み入り、散らかった部屋を見て愕然。

凌空が駆け寄って来て、雄司の影に隠れようとする。

雄司、それを躲し、

雄司「風邪はもういいのかよ」

凌空「(ケロツと) え？」

雄司「えじゃねーよ」

吾郎も滑稽な動きでやって来て、

吾郎「寝ない子誰だー？」

雄司「お前が誰だよ！」

と吾郎の顔周りのトイレットペーパーを剥ぎ取る。

吾郎「(ぜいぜいと息を切らし)ちゃんと寝ねえとおばけに連れてかれちゃうぞーってな」

雄司「自分の心配しろよ」

吾郎「へへっ。じゃあこっからは選手交代だ！」
と自分の体のトイレットペーパーを雄司に巻き付けようとする。

凌空、たどたどしく歌いだす。

凌空「いーとー巻き巻き いーとー巻き巻き」

雄司「あーもー！(吾郎に)俺はあんたの孫でもなければ、(凌空に)お前の親でもない！
：：：たまたま出会って、都合よく利用されてるだけだ」

絡みついたトイレットペーパーをむしり取り、

雄司「：：：で、俺はそれにしがみついている。必死で」

二人を残して部屋の奥へ。

顔を見合わせる吾郎と凌空。

吾郎、雄司を追い、

吾郎「どうした樋村君。酔ってるのか？」

雄司「なんかもう馬鹿馬鹿しくなってきた」

吾郎「いや：：：まあそら、たまたまだったか

もしれないけども。たまたま会って、そのまんま別れる人間だって山ほどいるわけだろう？」

雄司「だから何だよ」

吾郎「まああの、んー、そこんとこ俺にはちよつとわかんないんだけど……」

凌空がやって来て、雄司の脚にぴたつと抱きつく。

雄司「お前が抱きつきたいのは、自分のパパやママだろうがよ！」

と振り払う。

倒れ、泣きだす凌空。

吾郎「(凌空に) おお、大丈夫か？」

黙って見下ろす雄司。

吾郎、雄司の腕を掴み、

吾郎「そんなに人に求められたいか！ 一体何人の人間にどれだけ必要とされたら満足できる？」

雄司「別に……あんたにはわかんないだろう」

吾郎「ああわからない！ どれほどの人間に蔑まれようと、俺は一人で笑って酒を飲んできたからな！ わからんよ。お前さんのことも、そういう、俺自身のこと……さっぱりわからん！」

雄司、吾郎の手を乱暴に振り払い、

雄司「わかんない奴が説教なんかすんなよ！」

凌空、左右の手で二人のズボンをぎゅつと掴み、

凌空「ケンカはメ」

凌空を見下ろす吾郎と雄司。

鼻水をすすりながら見上げる凌空。

○総合病院・病室（夜）

刑事 B がサイドテーブル上にノートパソコンを置き、

刑事 B 「こちらなんです」

動画を再生する。

画面に見入る傑と泉美。

○パソコン画面

交番に設置された防犯カメラの映像。
幼児を負ぶった挙動不審の老人が入って来る。
女ものの財布をデスクの上に置くと、すぐに逃げるようにして出て行く。
巻き戻される映像。
幼児と老人の顔がはっきりわかるところで一時停止され、拡大される。
ぐったりとした凌空と、額に汗を浮かべてそれを負ぶる吾郎である。

○総合病院・病室（夜）

傑、画面の中の凌空を凝視し、焦燥して、
傑「息子、弱ってるんじゃない」
刑事 A「おそらく大丈夫です。後でご説明しますが……その前に奥さん、」
画面を見つめ、固まっている泉美。

刑事 B「(泉美の肩に触れ) 奥さん？」

泉美「(はっとし) はい」

刑事 A「この男でしたか？ お宅に侵入して、凌空君を連れ去ったのは」

泉美「(頷き) そうだと思います」

刑事 A「なるほど。まあ空き巣目的だったんでしょう。常習犯です。しかし聞くところによると、単に手癖が悪いだけで、人はそう悪くない。傷害や、ましてや誘拐なんていう前科はないんです」

傑「……で、凌空はどうなんです？」

刑事 B「ええ。どうも風邪をひいて、小児科にかかっていたようです」

傑「小児科？」

刑事 B「(泉美に) お子さん、ご自分のことを何とおっしゃってますか？」

泉美「……」

○雄司の部屋・居間（夜）

寝息を立てる凌空。
それを抱え込むようにして横になる吾郎。
雄司はそんな二人に背を向け、隅の方で眠っている。

吾郎「ズッ……ズッ……（鼻水をすする音が次第に大きく）ズッ、ジュルルル……」

雄司、目を覚まし、

雄司「はあ？何？きったねえ夜泣きだなあ」

吾郎たちの方を見る。

吾郎「（顔を背け）うるさい！泣いとらんわ！……ズッ」

雄司「じゃあついに液化が始まったか。死ぬならマジ外で死んでくださいね。それ以上床凹ませたくないんで」

吾郎「生きとるわ！今が一番生きとる！……でもまあ、潮時ってあるんだよなあ。何にでも……ズッ」

雄司「意味わかんね」

また背を向ける。

○東京の空（夜）

月は高く霞んでいる。

○雄司の部屋・居間（夜）

吾郎たちに背を向け、目を瞑っている雄司。

吾郎「寝た？樋村君」

雄司、応えず。

吾郎「あの、寝言だと思って聞いてほしいんだけど……俺、ずーっと寂しかったって、今気づいた」

背を向けたまま、そっと目を開ける雄司。

吾郎「寂しいだけの人生じゃ、泣けねんだな、人間」

雄司、目を閉じ、唇を固く結ぶ。

吾郎「だからつまり……あれだ、ありがとう」

雄司、小さく唾を呑む。

○アパート前（朝）

ゴミ袋を手に外階段を下りてくる雄司。

斜め向かいの家の前で、同じくゴミ袋を持った主婦が男女二人組（刑事A、B）に話しかけられている。

刑事A、写真を見せながら、

刑事 A 「この子でしたか？」

主婦 「さあ……暗かったんで。ただ……」

刑事 B 「ただ？」

主婦 「マジで絶対俺の子じゃない”って、若い方が確かにそう言っていました」

顔を見合わせる刑事 A、B。

雄司、ゴミ袋を持ったまま階段を駆け上がる。

○雄司の部屋・居間と玄関（朝）

凌空と吾郎がカーテンを体に巻いて遊んでいる。

凌空「カーテン巻き巻き　カーテン巻き巻き」

雄司、玄関に入るなり、台所にゴミ袋を放り、

雄司「巻き巻きしなくていい！」

凌空の元へ飛んで行き、腕を掴んで引き寄せ、カーテンを閉める。

凌空「痛いー」

雄司、しゃがみ、凌空と目を合わせ、

雄司「ごめん。なあ、今日お出かけしよるか！

いい天気だから」

吾郎「……何があった？」

雄司「（見上げ）あと一日だけ……」

○アパート前（朝）

少し離れたところに、ゴミ収集車の職員に声をかける刑事 A、B が見える。

大きなポストンバッグを持った雄司がアパートの外階段を下りてくる。

吾郎も続く。

○レンタカー店・外（朝）

店を出るレンタカー。

○走る車の中（朝）

運転席に雄司、助手席に空のポストンバッグ。

後部座席に吾郎、その隣にチャイルドシートに座る凌空。

凌空、窓の外を流れる景色に興味津々。

吾郎「(雄司に)どこ行くんだい？」

雄司「ああ……(バックミラー越しに凌空を見て)あ、海！どっすか？海。見たことないっぼいし」

凌空「海？ヒーヒキンいる？」

吾郎と雄司、バックミラー越しに視線を交わして笑う。

○ドライブイン・フードコート

背伸びをしながら歩く雄司。

雄司「っし、あとちよつとだ！」

後から続く吾郎と凌空、それぞれキョロキョロとよそ見をしている。

凌空、ソフトクリーム屋を見つけ、雄司のズボンを掴む。

○同・ソフトクリーム屋・前

店員、カウンターに並べられたコーンとカップの見本を指して、

店員「どちらになさいますか？」

雄司「(カップを指し)こっちで」

凌空「(背伸びして)こっち！(コーンを指す)」

雄司「よしとけよ、お前。ぜってえさあ……」

凌空「こっち！」

○同・みやげ屋・前

満足げにコーンのソフトクリームを両手で持って歩く凌空。

ちらちら見ながら歩調を合わせる雄司。

吾郎は既にその少し先におり、物欲しげに何かを見つめている。

雄司、吾郎の横を通り過ぎながら、

雄司「置いて行きますよ」

吾郎、雄司の袖を掴む。

視線の先には、ばら売りの塩豆大福が溜息をつく雄司。

○同・駐車場

小さなビニール袋を片手に、車を目指し

て歩く雄司。後から凌空、吾郎。

凌空、溶けだしたソフトクリームを慌てて食べようとする。

吾郎、塩豆大福のフィルムを丁寧に剥がし、かぶりつこうとする。

と、ポトツ

凌空「あ」

吾郎「あらー」

振り返る雄司。

凌空の足元にソフトクリームが。

雄司「ほーら、言わんこっちゃない」

凌空「んー」

コインを握りしめ、泣くのを必死に堪えている。

雄司、持っていたビニール袋から眠気覚ましのガムを取り出してポケットに入れ、しゃがみ込む。

凌空「ごめんなさい」

雄司、ビニール袋に手を突っ込み、ソフトクリームを掴んで処理する。

雄司「でも、自分の失敗では泣かないんだもん」

凌空の目を見て、

雄司「そこは偉い」

凌空「(さらに必死で涙を堪え)ん！」

吾郎「いじらしいねえ……ほれっ！」

と凌空の握るコインの上に、塩豆大福をまるごと乗せる。

凌空「だあぁー！ー！ーん！」

途端に大泣きする凌空。

○走る車の中

チャイルドシートで眠る凌空。口の周りに白い粉が。

隣でそれを見守る吾郎。こちらにも口の周りが白い。

バックミラーでその様子を見ながら運転する雄司。やはり口の周りが白い。

雄司「なんかもう……このまま、海の向こうまで行っちゃいましょうか」

吾郎「(遠くを見て笑い)悪くないかもねえ」
前方に海が見えてくる。

赤信号で停まる車。

その揺れで凌空が目覚める。

雄司、振り返り、

雄司「ほら、う(みだぞ)」

凌空「(被せて)お空はんぶんこー！」

空と海の青を二分する水平線を指さし、
はしゃぐ凌空。

吾郎「はあ、お空はんぶんこかー。そしたら、
半分はお前さんののだとしてだ、もう半分、
俺かこいつか、どっちにくれる？」

雄司「(吾郎に)なんすか、そのパパとママどっ
ち好き？みたいなの。(凌空に)おい、あれ
だぞ、ソフトクリームも塩豆大福も、俺が
買ってやったんだからな」

吾郎「(雄司に)もので釣ろうだなんて卑怯だ
ねえ。ろくな大人のすることじゃないよ。

(凌空に)さあ、どっちだ？」

凌空、吾郎と雄司を交互に見て、

凌空「(はにかみ)……」

○海へ続く道

信号が青になり、発進する車。

○海

寄せては返す波。じゃれる凌空。

少し離れたところで見守る吾郎と雄司。

二人とも、太もも辺りまでびしょ濡れで
ある。

吾郎「楽しかったな」

雄司「……」

吾郎「さ、そろそろ行こうか」

雄司「どこへ？」

吾郎「あの子には、帰る場所がある」

二人、遠い目で凌空を見つめる。

○雄司の部屋・玄関く台所(夕方)

ぼんやりと橙に染まる殺風景な部屋。

玄関のドアが開き、強烈な西日が射し込

む。同時に凌空が元気に飛び込んでくる。

凌空「ただいまー！」

吾郎、雄司も入り、ドアを閉める。

凌空、シーチキン缶を取って来て、

凌空「(雄司に)ごはーん！」

雄司、堪らず抱き上げ、

雄司「ごはんはおうちで、ちゃんとしたのを食べなさい」

凌空「？(吾郎に)ごはん食べて、それから、

おつきいお風呂行くでしょ？」

吾郎「おつきいお風呂もいいが、お前さんちのふつうのお風呂も恋しかんべ？」

近づき、凌空の頭を撫でる。

凌空「……あ！」

と吾郎の頬に手を伸ばす。

雄司もそちらを見る。

雄司「あ」

吾郎の頬にピンポン玉大の丸い虹のような光が揺れている。

吾郎「(自分の頬に触れ)？」

凌空、シーチキン缶を吾郎の頬の前にかざし、掬うようにして光を捉え、

凌空「(得意げに)ん！」

吾郎、横から覗き込み、

吾郎「おお、こいつか(と笑う)」

雄司「なんすか？」

吾郎、ドアの覗き穴を指し、

吾郎「あの穴から西日が入るだろう？そのでその光がうまいことレンズの縁で屈折すると、こういう丸い虹ができるんだ」

凌空、嬉しそうに缶を揺すって光を転がしている。

その様子を見つめる吾郎と雄司。

吾郎「俺には縁起ものだった。こいつが出る家じゃ収穫が多いんで」

凌空、手で蓋をして閉じ込めようとする。

しかし光は凌空の手の甲に映る。

繰り返し蓋をし直す凌空。

その度にすると逃げ光。

雄司、いたたまれず、凌空の腕を掴もう

とする。

その瞬間、まるで光が缶の中に閉じ込められたかのように消える。

凌空「あ！」

吾郎、玄関のドアを見て、

吾郎「……幕引きだ」

雄司、伸ばした手を下ろし、ドアを見る。

ピンポン！コンコン

刑事 A の声「警察です。先ほどこちらのお宅に入られたお子さんについて、少しお話を伺いたいのですが」

凌空、缶に蓋をした手を離さず、ドアの方を向く。

○アパート前（夕方）

雄司の部屋から、刑事 B が凌空を抱いて出てくる。

路肩に停められた車の前で待っていた傑と泉美、外階段下まで駆け寄って来る。階上・階下で視線を交わす凌空と泉美。ゴローという音が上空に響く。

○空（夕方）

夕空に尾を引いて飛行機が飛んでいく。

○アパート前（夕方）

刑事 A に連行され、雄司と吾郎が外階段を下りてくる。

先に階段を下りきった刑事 B、泉美の前に立ち、凌空を渡そうとする。

しかし泉美は立ち尽くしたまま、ただ複雑な目で凌空を見つめる。

凌空、泉美にシーチキン缶を差し出し、

凌空「きれいだよ。（笑い）あげる」

と蓋をしていた手をそつと離す。

缶の底を覗く泉美と凌空。空っぽである。

凌空「あれ……」

しょんぼりする凌空。

階段を下りきった吾郎、その様子を見た後、空を見上げ、

吾郎「お空はんぶんこ！」

凌空も空を見上げ、滲んだ飛行機雲を見つけて、

凌空「はんぶんこ！」

吾郎、愛おしげに笑い、

吾郎「水平線見て、その子そう言ったんで、俺聞いたんです。半分は自分のだとして、もう半分、誰にあげたいかって。そしたらその子……（泉美を見つめ）敵わんですよ」

泉美「（吾郎を見て）……」

吾郎の腕を引く刑事A。

吾郎、遠ざかりながら、

吾郎「きつと大変なことも、うんとあるんだと思います。でも、少なくとも、あなたとその子は、奪い合うような関係じゃない。どうか、それだけ忘れずに……」

泉美「……（凌空に）ごめんね。ありがとう」

刑事Bから凌空を受け取り、抱きしめる。

泉美の背に手を添える傑。

○走る車の中（夕方）

後部座席に座る吾郎と雄司。

二人の視線の先にはバックミラー。

アパート前の道に立ち、車を見送る傑と泉美、無邪気に小さな手を振る凌空が見える。

雄司「あーあ、とんだとぼちりですわ」

吾郎「ああ。とぼちりだよ。お前さんは、

巻き込まれただけだ」

雄司「や、いつすよ、別に。わりと楽しかつ

たんで」

吾郎「うん。そうだな」

車が道を曲がり、凌空たちの姿が見えなくなる。

雄司「……あの、今度もし、そちらが生きて

ムシヨ出られたら、もうちょっとちゃんと、

一緒に何かやりませんか？」

吾郎「へっ、ちゃんとって何だい」

雄司「なんかこう、孤児院でも何でも、少し世のためになりそうなこととか」

吾郎「ふん、若造が。まずはてめえのために生きてから言えや」

雄司「なんすか、そちらの心配してんのに」

吾郎「余計なお世話だ」

と窓の外を見る。

手錠をされ、膝の上に置かれた吾郎の両手。さりげなく親指が立てられている。

雄司、それを見て苦笑し、反対側の窓の方を向き、

雄司「けどほんと、このまま行ったら、最後はあなた、ムシヨか外かで孤独死するのがオチじゃないすか」

赤信号で車が停まる。

雄司、道行く親子三人連れを見て、

雄司「あの子は、あなたや俺のことなんて、すぐに忘れるんですよ」

吾郎、前を向く。親子連れが横断歩道を渡る。

吾郎「うん。そうだろうな。それでよかんべ。

俺はクズなりに、最後に随分……（笑う）」

雄司、吾郎を見る。

吾郎、また横を向き、道を行き交う人々を見て、

吾郎「……きつとあれだ、孤独っていうのは、死んで誰の心にも残らないことじゃなく、誰のことも思えずに生きてくことを言うんだろう」

雄司「……」

吾郎、雄司の方を向き、

吾郎「へへっ、臭いか。まあしかし、お前さんはまだ若い。もう少し欲張ったって、バチは当たらんべえよ。だからほら、しけた面すんない。前向け、前！」

親指を立てたままの両手を、真っ直ぐ前へと伸ばす。

○都会の道（夕方）

信号が青に変わる。

ルーフにパトランプを乗せ、車がスピードを上げて走って行く。

○海

波打ち際に、小さくおぼろげな足跡。
大きめの波が寄せて引き、それを消し去る。

○新・倉本家・キッチン

潮騒の聞こえる窓辺に、錆びたシーチキン缶が置かれている。
泉美、コンロの火を止め、白いご飯の盛りだされた三つの皿にシーフードカレーをかけていく。

傑がやって来て、

傑「お、美味そう。俺運ぶ」

泉美「ありがとう」

皿を持って去る傑。

泉美、窓の外へ向かって、

泉美「凌空ー、ごはーん！」

○海

波打ち際を駆け抜ける一人の少年。
先ほどのものより大きくはつきりとした足跡が残される。

○アパートの一室・ダイニング

そこらじゅうに××引越社の段ボール箱が置かれている。

それらを手際よく整理する雄司。

玄関の方から若い男の声が。

男の声「樋村さん、この荷物、もう運び出しちゃっていつすよねー？」

雄司「あ、うん。よろしくー」

別室へ移動する雄司。

○同・別室

ドアを開ける雄司。

部屋の隅にしゃがみ、荷造りをする女の後ろ姿が。

雄司「いいよー、俺のは。自分でやるから。休んでて」

振り向く女。腹の大きな結衣子である。
結衣子、段ボール箱から薄い小包を取り出し、

結衣子「ねえこれ、取ってあったんだ」

雄司「ああ……」

結衣子「新しい家で観よっか」

雄司「（微笑み）うん」

○とある家の玄関・内（夕方）

しわだらけの手が、ドライバーなどを器用に扱い、鍵回りをいじっている。
その手元を見つめる真剣な眼差し。
額から流れる汗が頬を伝う。

吾郎「よしっと」

汗を拭いつつ立ち上がる。
と、その頬に丸い虹が映る。

○居酒屋・カウンター席（夜）

カウンター席で一人酒を呷る吾郎。

真っ赤な顔で店員に絡む。

吾郎「やあー、働いた後の酒っちゃ、格別だねえ」

適当にあしらい、別卓へ料理などを運ぶ店員。

座敷席の方が何やら騒がしい。

男の声「では、樋村君の栄転と、元気なお子さんの誕生を願って、乾杯！」

そちらを見る吾郎。

○同・座敷席（夜）

誕生日席に座り、恐縮気味の雄司の姿が。

雄司「ああ、どうも、ありがとうございます。

けど、なんだか、俺こんなんで色々大丈夫なのかなって感じなんすけど……」

と小さく一口、ビールを飲む。

○同・カウンター席（夜）

吾郎、忙しそうに空のグラスを両手に持って戻って来た店員に、

吾郎「ねえ聞いて。俺、社長なのよ。すごい

べ？」

店員、愛想笑いし、カウンター内へ。

吾郎「しかし、（親指で座敷席の雄司を指し）あっちのあんちゃんは、もっとすごいもんになるわけだ」

店員、洗い物などしながら、

店員「へえ。お知り合いで？」

吾郎「やあ、赤の他人だけれども。ただね、少し元氣をもらったんだ。一杯ぐらい、他人が祝い酒贈ったってよかんべ？」

ポケットからくしゃくしゃの一万円札を出し、

吾郎「この店で一番いい酒、持ってってやって」

○同・座敷席（夜）

店員が日本酒を持って来て、雄司の前にグラスを置く。

雄司「？」

店員、トクトクと注ぎ、

店員「あちらのお客様からです」

とカウンター席を指す。

そちらを見る雄司。しかし誰もいない。慌てて店内を見渡す。

店員の声「ありがとうございましたー」

雄司の視線が出口の方へ向けられる。

雄司「……（笑い）クズが」

店を出る老人の後ろ姿。その背には「空き巣ひとすじ60年！俺にしか開けられない鍵つくります！脱泥鍵屋」とある。

雄司、グラスの酒を一気に飲み干し、

雄司「おっし！大丈夫だ」

○都会の飲み屋街（夜）

老若男女多くの人で賑わう飲み屋街。

一人、どこへともなく歩く吾郎。

吾郎「（呟く）皆がんばれー、俺もがんばる」
やがて、人混みに紛れて見えなくなる。